

成田空港の「今」を届ける情報誌

GREEN PORT *Report*

2025
10
October

就任のご挨拶

代表取締役社長 藤井 直樹

FOCUS ON !

- ・フードラボNRT
- ・リチウム電池航空輸送
- ・第2ターミナル オンラインクリニック
- ・NARITA ART RUNWAY

Contents

■NRT APPROACH

滑走路造成工事に本格着工、
並びに成田空港滑走路新增設推進協議会を設置

■数字で見る成田空港

航空燃料を運ぶ油槽船が5万隻を達成

■先生に伺いました

筑波大学システム情報系社会工学域 岡本 直久 教授

■協働の現場を訪ねる

海上保安庁 千葉海上保安部 × NAA 給油事業部



『GREEN PORT REPORT』は、WEBでもご覧いただけます。

◀ <https://www.narita-airport.jp/ja/company/media-center/publications-pamphlets/greenport/>

就任のご挨拶

成田国際空港株式会社 代表取締役社長の藤井直樹です。6月の就任後、初めて小誌にてご挨拶させていただきます。微力ではありますが、成田空港の発展のために全力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

▶特に力を入れて取り組んでいきたいこと

今後特に大事にしていきたいと考えていることは、次の3点です。

01 空港と地域の共生・共栄の継続・発展

成田空港は、開港以来、わが国の表玄関としての役割を果たしてきました。これは、何よりもまず、周辺自治体や地域の皆さまをはじめとした関係者の方々のご理解、ご協力、そしてご支援あつてのことだと考えます。これまでの成田空港の歴史のなかで醸成されてきた関係者の方々との信頼関係をさらに深め、空港と地域の共生・共栄を目指し、努力してまいります。

02 安全の確保

航空輸送にとって最も重要なのが安全の確保であることは、言うまでもありません。航空機事故の未然防止はもちろんのこと、台風や地震などの自然災害や新型コロナウイルスのような感染症が発生した場合の対応、サイバーテロ対策など、さまざまな状況に応じた危機管理を徹底することが必要です。こうした備えを万全にすることにより、わが国の基幹空港である成田空港の安全・安心で安定したサービスをしっかり確保してまいります。



03 航空需要の増加や多様化に対する的確な対応

コロナ禍も収束し、日本を訪れる外国人観光客は今年(2025年)、いよいよ4000万人を超えようかという勢いです。成田空港は首都圏の基幹的な国際空港として、これらの増大するインバウンドや物流の需要にしっかり応えていく必要があります。そのためには、国際線ネットワークはもちろんのこと、ローコストキャリアを中心とした国内線ネットワークについてもさらなる拡大を図り、ハブ空港としての利便性の向上を目指してまいります。また、インバウンドだけでなく、「日本人の方にも選ばれる空港」となることも課題の一つです。成田空港と都心のアクセスは、交通機関の整備により時間的な距離は世間のイメージより格段に短くなっています。成田空港のポテンシャルを最大限に日本国内にPRしつつ、さらなる需要拡大に努めてまいります。

▶成田空港のさらなる発展にむけて

当社は、滑走路の新設や既存路の延伸などを含む「更なる機能強化」に着手するとともに、旅客取扱機能や貨物物流機能の集約などを含む『新しい成田空港』構想を推進しています。開港後50年弱を経た各施設の老朽化への対応、デジタル技術の活用による空港運用の高度化・効率化、鉄道をはじめとする空港アクセスの利便性の向上など、今後さまざまな事項について検討を進める必要があります。課題は山積しておりますが、関係者の皆さまとしっかり連携・協力しつつ、「第2の開港」ともいうべきこの時期になすべきことを見定め、着実に推進してまいります。日本、さらには世界のために、なくてはならない公共インフラとしての成田空港をますます発展させるために全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

成田国際空港株式会社
代表取締役社長

藤井直樹

1961年生まれ。千葉県松戸市出身。83年東京大学法学部卒業後、運輸省入省。国土交通省航空局首都圏空港課長、自動車局長、鉄道局長、事務次官などを歴任。損害保険ジャパン(株)顧問を経て、2025年6月20日より現職。

FOCUS ON!

FOCUS ON! ①

フードラボNRT

NAAでは、社員が新しいアイデアや取り組みを自由に提案しプロジェクトとして実行する、プロジェクト提案制度「Creative Challenge 20」を2022年から運用している。社員の自己成長やクリエイティブな取り組みに挑戦する企業風土を醸成するのが狙いだ。そのプロジェクトの一つが、空港従業員の食環境向上を目的として、同年に始動した「フードラボNRT」。さまざまな部署に所属する若手社員を中心に、空港内外の関係者と連携を取りながら日々取り組みを進めている。

01 空港従業員の食環境を向上

フードラボNRTが2022年から実施しているのが、NAA本社ビルの厨房を活用した取り組み。コロナ禍で成田空港内の食堂や弁当販売業者の撤退が相次ぎ、空港従業員の食事の購入先や食事場所が少ないという課題があった。航空需要が回復するなかで、空港従業員の食事の需要に对应していくため、空港内の食堂跡地を活用して食事スペースを増やすとともに、NAA本社ビルの厨房で作った弁当を空港従業員向けに出張販売することに。販売前には空港従業員にヒアリングを行い、厨房事業者との試食会を重ねた末、販売するメニューを決定。現在では空港内8カ所で、10～15種類の弁当を販売している。2024年4月から今年5月までの累計販売数は約4万食。地元の高校や農家とのコラボレーションメニューや野菜の販売などを試験的に行ったり、グループ会社に弁当を提供したりすることも。今後もデリバリー先の拡充やメニューの更新に加え、社外の方による本社食堂の利用や懇親会での利用などさまざまな検討を進めていく方針だ。



弁当はさまざまな価格帯で、和洋中問わず多彩なメニューを販売。



定期的に試食会を行い、メニューの刷新や改良を重ねている。

02 食堂向けの野菜や名産品を創出

また、2024年4月から取り組んでいるのが、騒音対策用地^{※1}の利活用だ。空港北側にある騒音対策用地約12,000㎡を活用し、協業先と連携しながら、主に空港内で消費する野菜・果物の栽培や産品創出に向けた取り組みを行っている。2024年から今年にかけて6次産業化^{※2}しやすいブドウ(シャインマスカット、ワイン用ブドウ)や成田市の特産品である栗を植え付け、協業先において2026年以降に収穫したものを市場や店舗、ECサイトなどで販売して収益化を目指すのに加え、将来的にワイナリーの整備も念頭に置いている。畑の一つでは、季節の野菜の苗を5月に植え、収穫後は空港内の食堂にて活用した。将来的には、協業先とともに新たな地域産品の創出を目指すとともに、体験農園・貸農園の導入など検討の幅を広げることを目標としている。フードラボNRTでは、今後も「食」をきっかけとしたさまざまな取り組みを通じて課題解決や価値創造を図っていく。

※1 航空機の騒音による生活環境への影響を防ぐために、NAAが所有している土地

※2 農林漁業者(1次産業)が、生産した農林水産物を自ら加工(2次産業)し、流通・販売(3次産業)までを手掛けること



5月にトマトやキュウリ、トウモロコシなどの夏野菜の苗を植え付け。11種、合計220株の苗植えを18名で実施した。



ブドウ栽培に必要な支柱には、約300本の伐採木を使用。社会的意義のある取り組みを目指している。

リチウム電池航空輸送

成田空港コミュニティが「IATA CEIV Lithium Batteries」認証を取得

NAAは、IATA(国際航空運送協会)の提唱するリチウム電池の航空輸送品質認証「CEIV Lithium Batteries」取得のため、成田空港で国際航空輸送に携わる関係事業者とともにコミュニティを結成し、今年3月にコミュニティ参加企業全5社の認証取得が完了した。併せて、IATAから日本初となる「CEIV Lithium Batteries パートナーエアポート」として当空港が認定された。これにより、コミュニティ参加企業はリチウム電池を安全に輸送できる事業者として認められ、当空港は安全の保証された高品質なサプライチェーンを提供できる空港として認められたこととなる。

「CEIV Lithium Batteries」は、IATAが策定した特殊貨物の航空輸送に関する4つのCEIV※認証のうち、リチウム電池の輸送に関する品質認証制度。リチウム電池は航空輸送需要が増加しているが、爆発や火災といった重大事故につながるリスクを伴う危険品であることから、航空業界として安全確保が大きな課題になっている。

※ The Center of Excellence for Independent Validatorsの略称

空港としての品質をアピールし航空物流拠点化を促進

成田空港コミュニティは2024年9月に結成。認証の主体は航空会社、グランドハンドリング会社、フォワーダーなどの物流事業者である。一方で、空港が中心となり航空輸送を担う事業者が団体として認証取得を目指す「空港コミュニティ方式」も採用されている。空港会社としては、物流の各段階を担う事業者が認証を取得することで、高品質なサプライチェーンを提供できると認識されること、また「CEIV Lithium Batteries パートナーエアポート」に認定されることにより、空港の品質をアピールできるメリットがある。各物流事業者はIATAによるトレーニングを受講した上で、リチウム電池の安全な取り扱いに必要な「品質管理システム」や「リスク管理システム」などの社内体制が確立されていること、条件を満たす「施設・設備」を保有していることなどを対象に、IATA派遣の監査員による査察を受け、今年3月に合格したことで認証が交付された。

NAAは、引き続き関係事業者と協力し、特殊貨物の取り扱い品質のさらなる向上を目指すとともに、当空港の航空物流拠点化を促進していく。



成田空港コミュニティ



JAPAN AIRLINES

Connecting your dreams



三井倉庫 エクスプレス



三井倉庫 サプライチェーンソリューション



認証取得のために必要なトレーニングをコミュニティメンバー合同で受講。

コミュニティ合同訓練を開催予定

今年11月にはコミュニティによる合同訓練を、成田空港で開催する予定だ。上屋内でリチウム電池が発火したことを想定した初動訓練や、関係者間の情報伝達訓練を行うことで、さらなる安全性向上を目指していく。

第2ターミナル オンラインクリニック

空港を利用するお客さまや空港従業員に医療サービスを提供

空港を利用するお客さまや空港内で働く従業員に向けた医療サービスを提供するため、オンラインクリニック「成田国際空港第2クリニック」が6月、第2ターミナルにオープンした。診療科は内科で、第1ターミナルで「成田国際空港クリニック」を運営する一般社団法人晴天会の医師が診察を行い、日本語・英語・中国語に対応する。オンラインでの診療(保険診療可)のほか、処方箋の発行、医療機関の紹介を行う。また、国内滞在中のインバウンドのお客さまへのアフターフォローも行う。診察は週3日(木・土・日曜日)で、クリニックには受付スタッフもしくは看護師が常駐する。将来的には365日診療を提供できる体制を整え、誰にでも安心してご利用いただける空港を目指す。



オンライン診療のイメージ

診察希望の患者が来院後、院内で診療ドクターと接続し、診察開始



オンライン診療が可能な場合

診察後処方箋を発行※1

オンラインでの診療が難しい場合

医療機関の紹介※2



※1 医師の判断で薬を処方できない場合や、オンライン診療において処方できない場合がある

※2 緊急を要する場合は、救急要請することがある

NARITA ART RUNWAY

日本の才能を世界へ 成田空港初のアートコンペティションを開催

空港の価値創造プロセスの一環として、日本の若手アーティストの世界進出を後押しするアートコンペティション「NARITA ART RUNWAY」を開催する。日本で活動する35歳以下のアーティストを対象とし、毎年異なるテーマの作品を募集。入賞者(大賞・佳作)には、賞金のほか、成田空港内で作品展示をする機会が与えられる。

初開催となる2025年度の募集テーマは「キャリアケース」。7月に全179の応募作品のなかから大賞・佳作・オーディエンス賞が選出された。大賞1作品・佳作3作品は10月上旬から11月下旬まで、第2ターミナル3階国際線出発ロビー保安検査場(北側)前での展示を予定している。

本コンペティションを通じ、成田空港に訪れた人々と若手アーティストとの出会いを提供し、国境を超えた新たなつながりを創出。日本の玄関口である成田空港から日本の才能が世界へ羽ばたくことを後押しする。



成田空港が日本のアート&カルチャーを世界に発信できる空港となるよう、取り組みを継続的に実施し、次世代型の旅客体験価値創造を目指す。



大賞作品はYUSUKE WAKATAの「NO DESTINATION」。歩み続けるキャリアケースを表現した。

NRT APPROACH

成田空港の最新の取り組みを紹介する

滑走路造成工事に本格着工、 並びに成田空港滑走路新增設推進協議会を設置

成田空港ではB滑走路の延伸、C滑走路の新設などにより、航空機年間発着容量を30万回から50万回に拡大する「更なる機能強化」に取り組んでいるが、工事の準備が整ったことから、5月に滑走路造成工事等に本格着工し、式典を開催した。式典では国土交通副大臣、千葉県知事などの列席者の方々と鉄入（工事の安全と成功を祈願し、象徴的に最初の土を掘る儀式）を行った。

今後も地域の皆さまのご理解とご協力をいただきながら、着実に当事業を進めていく。



5月、2029年3月末の新滑走路などの供用開始を目指し、必要な用地確保等の具体的対策を検討し実行に移す場として、国、千葉県、成田市、芝山町、多古町、NAAとで、新たな会議体「成田空港滑走路新增設推進協議会」を設置した。

8月に第2回を開催したところであり、この協議会において、今後も緊密に連携・協力しながら、今年度末を目標に必要な用地確保等を加速化していく。



工事状況の詳細はこちら▶



会議内容の詳細はこちら▶



先生に伺いました

【今回お聞きしたいこと】

海外からの旅客を増やすために 空港に求められることは？

昨年、開港以来、過去最高の外国人旅客数を記録した成田空港。今後、訪日旅客をさらに増やしていくために、空港にはどんな機能や取り組みが求められているのか。筑波大学システム情報系社会工学域教授の岡本直久さんに伺いました。

観光行動における特徴はどのようなものがありますか。今後、訪日旅客をさらに増やしていくために、空港には何が求められるのでしょうか。



マーケティング統括室
野澤 一貴さん

観光需要の波動性と観光地の課題

観光行動には原理原則として、いくつかの特徴を挙げることができる。

特徴の一つは、需要に波動性があるということ。日本人が観光する月は8月が最も多く、二番目は5月。三番目は、気候の安定している10月とされてきたが、9月中下旬のシルバーウィークのほうが、比較的多くの人々が観光しているようだ。かたや、観光地側にも“旬”の時期がある。例えば、これから始まる紅葉は北から少しずつ南に移動するかのよう、いろいろな場所でその彩りを楽しませてくれる。成田山新勝寺など、神社仏閣がある観光地には1月に人が集まることが多い。ある特定の季節や時間帯に集中するため、ピーク時に合わせた受け皿を用意できないのが悩ましいが、ピーク時の需要を分散させたり、オフピーク時の魅力を創ってギャップを少なくしたりして魅力低下を防ぐ必要がある。

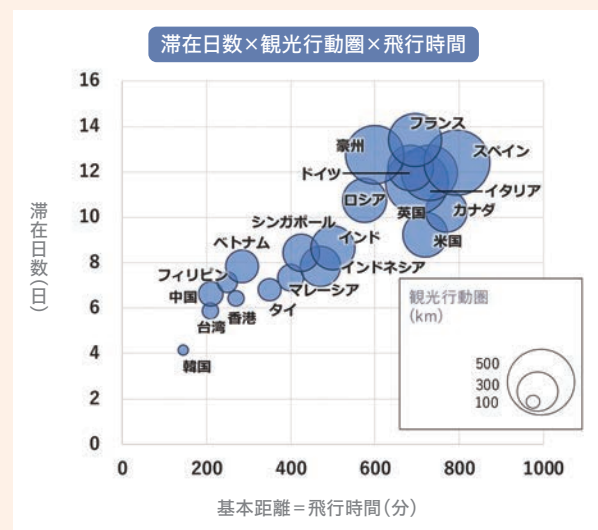
訪日旅客の居住地と観光行動の意外な関係とは

また、もう一つの観光行動の特徴として“周遊”の存在が挙げられる。この各所

を巡る周遊の行動は、来訪者の居住地と観光地との間の距離に比例して拡大する。近場の観光地に行く旅行は、期間が短く、移動範囲も狭い。逆に遠方に行った場合は長く広い。卒業旅行でヨーロッパや北米に行き、何泊も何カ国も訪問するのがその例だ。これを最近、日本にきた外国人旅客

の行動で描くことができた（右上図）。この図は、どんな場所から日本に来るかによって、求めているメニューが違うことを如実に表している。欧米からの来訪者は関東だけで満足するわけがない。日本全体で、そのためのメニューを考案しなければならないのである。

そして、これからは、この行動圏域が広がって、アジアを周遊しようとする来訪者も増えるかもしれない。そのときには、今以上に乗り継ぎ機能の充実が、空港には求められるのではないだろうか。



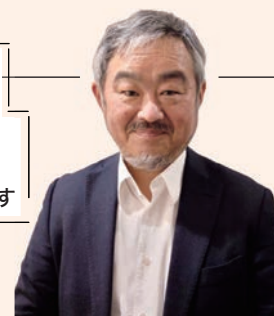
訪日外国人消費動向調査より作成

最後に、観光を語るときに必ずリピーターという言葉が出てくる。来訪者が将来、日本に再び来てくれるかは、本人にも分からない。だからこそ、多くの来訪者にリピーターとなってもらえるように、良い印象で帰ってもらうことが肝要といわれている。旅行のFirst Impressionをつくるのも空港、Last Impressionをつくるのも空港である。これからも旅行者に、また来てもらえるように、引き続きの取り組みをお願いしたい。



訪日旅客の周遊と再訪を促す、
乗り継ぎ機能の充実と

旅の最終経由地として
さらなる魅力向上が
空港には求められています



答えてくれた先生は —— 岡本 直久さん

筑波大学システム情報系社会工学域教授、同大学大学院サービス工学学位プログラムリーダー。博士(工学)。専門は観光科学、交通計画、社会基盤・プロジェクト評価。多様な統計や人流データを活用した観光行動の解明と、それにもとづく政策研究が近年のテーマ。

Number

数字で見る成田空港

成田空港の最新の取り組みや動向を「数字」の動きから紹介する。

航空燃料を運ぶ油槽船が**5万隻**を達成

5万隻



千葉港頭石油ターミナルにおいて1982年12月から始まった航空燃料の荷役※が、2025年3月に累計5万隻を達成した。これを記念し、4月にはこれまで航空燃料の安全輸送および安定供給へ尽力し、空港事業の発展に多大な貢献をした船舶運航会社・船舶代理店など関係者を招き、記念行事を実施。これに加えて、千葉港頭にて安全祈願を行った。

成田空港に運ばれる航空燃料は、当初は港から貨車で運んでいたが、1983年8月に6市町（千葉市、四街道市、佐倉市、酒々井町、富里市、成田市）を通して千葉港と空港を結ぶ全長約47kmのパイプラインが完成。現在もこのパイプラインを通じて航空燃料を空港まで運んでいる。5万隻の油槽船で運ばれた航空燃料は、累計約1億6700万kL。42年間、無事故で供給を続けている。

成田空港は今後も安全かつ安定的な航空燃料の供給体制を継続していく。

※貨物の積み下ろし、運搬、仕分けなど、モノの取り扱いに関する作業の総称。



増加する航空需要に対応しながら 安全で安定した航空燃料の供給を

成田空港で使用する航空燃料は、東京湾内の千葉港頭石油ターミナルにタンカーから荷揚げされ、パイプラインを通じて空港に運ばれている。2025年には、無事故で油槽船運搬累計5万隻を達成した。こうした航空燃料輸送や千葉港の安全管理などについて、千葉海上保安部長であり千葉港長でもある岡光氏と、NAA給油事業部千葉港頭事務所長の小島氏に伺った。

危険物荷役量日本一の港で 安全かつ高品質な燃料供給を目指す

小島: 千葉港頭石油ターミナルは成田空港への航空燃料輸送の起点です。安全かつ高品質な供給を維持するため、品質試験を含めた管理を行い荷揚げします。空港には常時7日分以上の備蓄燃料がありますが、当ターミナルからのパイプライン送油は、空港での航空機運用に直接影響を及ぼすため非常に重要な施設だと認識しています。



岡光: 千葉海上保安部は千葉県内房地区が管轄で、管轄海域の安全安心を守るため、海難の防止・救助や海上犯罪の取り締まりなどを24時間365日体制で行っています。実は、千葉港は危険物の荷役量・隻数とも日本一※1。石油・化学製品を中心に引火性・有毒性の高い貨物が日々運搬される、わが国のエネルギー供給や産業活動を支える拠点です。なかでも千葉港頭石油ターミナルさんは多数の船舶が往来する千葉航路に面していて、高い安全管理体制が求められます。

小島: NAAでは構内作業員全員に保安に関する教育を実施していますが、これに加えて千葉海上保安部さんには日頃から着陸や危険物荷役時の設備や運用のご指導をいただき、海上防災訓練も合同で行っています。こうしたご支援により42年間無事故で油槽船5万隻の着陸を達成できました。

岡光: 高い安全管理意識と適正な体制のもと、無事故での荷役達成に改めて敬意を表します。「一隻のタンカー、一滴の危険物」が社会全体に大きな影響を及ぼしかねないという認識のもと、我々も引き続き船舶の安全航行に資する情報提供や、港湾関係者の皆さまへの安全講習会や指導を行い、安全荷役を支援していきたいと考えています。

海外から初めての燃料輸入に連携して対応

小島: 当ターミナルでは2024年、初めて、海外から直接航空燃料を受け入れました。千葉海上保安部さんには初期段階から受け入れに必要な法的手続きや安全対策面のご相談をさせていただきました。

岡光: ハード面では受け入れる外航船が現状のバース（棧橋）設備のスペックで安全に着陸できるか精査を行い、ソフト面では外国の船長に対し航行ルールやバース着陸・離陸操船方法について事前の教育をお願いするなど、前広に連携して対応しました。

小島: 実務的な観点からのご指導のおかげで、迅速に受け入れ体制を整えることができました。ほかにも当ターミナルでは設備面の確認、各所との運航調整、輸入燃料の品質と安全性の確保など、さまざまな調整やルール化を行いました。国から関係各社への働きかけもあって、スムーズに燃料の受け入れを実現することができ



NAA 給油事業部
千葉港頭事務所長

小島 岳さん

海上保安庁
千葉海上保安部長 千葉港長

岡光 豊さん

した。

NAAでは今後も外航船の受け入れは増加すると見込んでおり、棧橋のSOLAS岸壁化※2に向け検討を進めています。この取り組みにあたって千葉海上保安部さんなどからご指導いただき、安全性と実効性を両立した受け入れ体制の構築を目指しているところです。

岡光: 千葉海上保安部でも港内パトロール、不審船や不審者の侵入想定訓練などによりテロ対策を実施しており、引き続き管轄海域内の船舶交通の安全確保に万全を期していきます。海上保安官の仕事は、国民の安全安心を海から守る非常にやりがいのある仕事。将来、目指してくれる人材が増えてくれることを願っています。



小島: NAAとしても将来にわたってご指導をお願いしたいと考えています。一方、成田空港では、将来的に航空機年間発着回数50万回規模の運用が想定されており、C滑走路の新設など、空港機能の強化に向けた取り組みが進められています。これらの構想の実現には、増加する航空需要に対応した航空燃料の安定供給が不可欠で、当ターミナルの果たす役割は今後ますます重要になります。空港の発展に追従できるよう、日々の運用や整備を図ってまいります。

※1 令和6年「海上保安統計年報」 ※2 海上人命安全条約（SOLAS条約）に基づいて、港湾施設の保安対策を強化し、特定の岸壁区域への立ち入りを制限する措置のこと。



① 昨年度より千葉海上保安部さんご協力のもと、落水事故に備えた対応訓練を開始。救助側の訓練として、落水者への浮環の投てきやボートへの引き上げなど、有事を想定した実践的な対応訓練を行った。② 作業着で落水した場合の泳ぐ困難さも体験。焦らずライフジャケットを適切に使用する重要性を学んだ。

